

第二期 第二十七号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2019.08.20 定有堂書店 発行

本屋の青空

闇の手触り

墨田区の空の下、荷風の魂は宿る

サンフランシスコ初訪問記

言い訳

ホーチミン報告② ホーおじさんの願い

林檎喰いの受難

坪井日記⑬

智頭町から始めて

鳥取あれこれ その三十六

フランクとブルックナー (2)

猫の一生

ミント

脚立がこわい

奈良 敏行

ワクサカソウヘイ

萩原 俊郎

五島 朋子

鳥居 貴彦

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

古賀 啓三

あぎの素生

ドラマメリア

本屋の青空

奈良 敏行

(定有堂 店主)

「本屋の青空」ということばを好んで使うが、本屋と青空の関係をうまく説明することはたやすくはない。それでも捨てがたい語感があつて手放せないでいる。本屋と青空は同じようなものだと思つていいのだろうか。

久しくじつは本当の青空を見たことがない。バンアレン帯の崩壊で裏日本の鳥取にも青空が増えていく。青空を見ないというのは視界が街に閉ざされているというだけのことだ。街に興味を失うともつと空をながめるだろう。わたしの「青空」は架空の青空だ。

青空は破壊と創造の境目にある。青空の形容に「抜けるような」ということばがある。視野を妨げるものがないわけだ。晴れ上がるといふのは雲がない空だ。でも大気がなければ青くはならない。

宇宙の晴れ上がりという言葉もある。ビッグバンの後、

…… 編集後記



宇宙が広がり、光が突き抜けることが、可能になる状態をいう。一つの終りと一つの始まりの結節点だろうか。

青空には光がある。本屋には本がある。本は光なのだろうか。

本屋は路上と接続されている方が楽しい。この接続と青空はじつは同義だ。

バザールということばもある。公共性の高い路上に常設でない市が立つ。いろんな業種がブースを並べる。特別な時間が生まれる。この特別な時間を祝祭という意味で青空だ。なにか突き抜けた解放感がある。

本屋には解放感があるといってもよかつたのかもしれない。

先日定有堂の店内でOさんと長話をしていたとき（客の少ない休日の昼下がりがだった）、高校生のときよくこんな話をしてきたなと後で思い起こした。それも教室でなく路上でとりとめもなく話し込んでいた。一人の友人は「てつがく」をしなければならぬから進学する暇がないといって受験しなかった。いま思えばそれは少し変だと気づくことができる。

最近「物質は粒子であり、同時に波動である」「物質というのはいすくろのろい光」という議論を読んだ。『アインシュタインを超える』という新書が典拠のようだったので、これは古書で取り寄せた。なんとなく仏教と物

理学が重なり合ってくるような気がした。この飛躍がじつは「てつがく」なのかもしれない。

そういう話をOさんにした。Oさんは国語の先生なので、いつも正面から応じてくれる。「そのテーマなら定有堂のあそこの棚にもあるよ」と導いてくれた。NHK出版の『般若心経』（佐々木閑）だった。「なぜ？」と聞いたらこの著者は理系の出身でのち仏教者となったひとだから、同じ道筋をたどって説明してくれるよ」と。その夜から読み始めた。ふと思いついたら、この本は市内の禅僧の方が、昨年カルチャーセンターでテキストに採用した本だった。しかも自分のギヤラで生徒の数だけ購入され無料で配布されたもので印象に残り必備の本にした。一年遅れて紐解いたことになる。縁だろうかしかもその数日後この禅僧の方と店内で遭遇し、問いを投げかけた。同じ著者に『仏教は宇宙をどう見たか』というのもあると教わり、これは品切れだったので、取り急ぎ県立図書館で借りだした。

物質は粒子であり、同時に波動であるというのは別のあらわれのようだが一つのことだというのがわたしの「てつがく」の謎だ。この本では『俱舍論』の世界観の語彙で「極微」と説明してあった。「かたち」はこの「極微」の集積の全体なのだと明快に解き明かされる。

高校生のときの「てつがく」は「果」があるから「因」

がどこかにあるはずだという一事だったのかもしれない。

それから長い年月が経ったのだけれど、やはり同じような極微をめぐる「てつがく」が念頭を去らない。

日々のあれこれが抜け落ちていくと青空の占める量が増える。この「てつがく」に出合えるところは、わたしにはこの「本屋」しかない。そして本屋がそういう機能を持つためには路上と接続している必要がある。日々が遠ざかり光が直進するこの光景を「本屋の青空」という。書物と光は一つことだと思う。

2019. 07. 24

中沢新一・夢枕漢・宮崎信也『ブツダの方舟』河出文庫 1994

ミチオ・カク他『アインシュタインを超える』ブルーバックス 1997

佐々木閑『般若心経』NHK出版「100分de名著」2014

佐々木閑『仏教は宇宙をどう見たか』化学同人 2013

本の紹介

() 寄贈いただきました。奈良

徳永進・高草木光一(編)

『いのちの現場でとまどい』 岩波書店 2019・6

四十年以上臨床医として現場にたち文化運動もつづける鳥取野の花診療所院長の最新作。この本は、著者への入門書でもあり集大成でもある、特別な一冊だ。

二〇一七年から一八年にかけて、慶応大学で三回講義する。思想としての医学概論を模索する高草木教授の求めに応じたものだ。講義をめぐる往復書簡も、三回やりとりされている。

高草木教授の発問は、「最善を尽くす」とはなにかだ。しかし徳永医師は、「とまどい」が大切だとハシゴを外す。とまどい「ことが最善なのだ。現場を抽象化して正しい「結論」をつくることを嫌う。

現場にはひとつとして同じ事はなく、「とまどい」だけ。だからどこにも「概論」はない。あるとしたら、「方法としての故郷」だけ。「故郷の患者さんだったら、これは手を抜くわけにはいかな〜」

「手を抜かなかつた事例の数々こそが、伝えたいことの手本であったかもしれない。

闇の手触り

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

なりきな臭いものを感じる。

これだけ問題が燻ぶってしまったのは、ひとえに宮迫の最初の謝罪が言い訳と嘘にまみれていたことが原因だ。リスクマネージメントの観点から見ても、あれは悪手の中の悪手と言わざるをえないだろう。で、ここでふと、違和感がよぎるわけだ。天下のコンプライアンスと、海千山千のリスクマネージメントを誇る吉本興業が、なぜ宮迫にはあんな稚拙な謝罪文を、しかもツイッターという炎上しやすいツールで発表させたのだろう。島田紳助の時は、その日のうちに鮮やかな引退会見を開いていたというのに。

「闇営業」という言葉が、瞬く間に広まっていった。元々これは、私が属している演芸の世界でのみ通用していた隠語で、「事務所を通さない仕事」のことを指していた。今回、反社会勢力のパーティーに複数名の芸人が「闇営業」として参加していたことがワイドショーなどで問題視され、世間に隠語が明るくなった形だ。誤解してほしくないのは、「闇営業」という言葉に「反社会勢力の膝元で仕事をする」というニュアンスは元来含まれていなかったという点。「闇」というインパクトの強いワードは、あくまで「事務所を通さないで仕事しちゃったよ」という範囲内の自虐的な意味合いで使われていたのだ。言葉の印象変化って、面白い。

にしても、今回の騒動、傍目から見ているだけでもか

ここが、きな臭い部分である。完全に個人的解釈として聞いていたんだけど、吉本興業は明らかに情報操作と隠れいを行っている。世に出てはまずい情報がまだまだあって、それを闇に葬ろうと必死なのだろう。宮迫たちも何かしらの圧力をかけられているはずだ。

そんな吉本興業の、養成所なる機関で、私は長年講師を務めている。未来の芸人たちに向かって最近話しているのは「ハラスメント」について。その時代の常識を理解することができて、初めて芸人たちは非常識なふるまいを行うことができる、との信条からそんなことを偉そうに教えているわけだ。

セクハラやパワハラを行ってしまう人たちは、他者を

「人間らしく」扱うことのできない人たちだ。それはつまり、自分自身のことをまず「人間らしく」扱うことができている、というところに問題がある。彼らは、年収や役職、乗っている車や身に着けている時計など、フォーマットでしか「人間らしさ」を形成することができていなくて、それはつまり虚偽の「人間らしさ」ということになる。早い話、心象風景が欠落している人間なのだ。ということはハラスメントって、教育の問題ということになるわけだから、なるほど「闇」は深い。

「心の闇」に問題がある、なんて言説が、犯罪が起きるたびにワイドショーで取り上げられる。私はそこにも違和感を抱く。「心の闇」が存在している者こそが、真っ当なのではないか。他者を無闇に傷つける人は、文字通り、闇すらない人間なのではないか。「心の闇」に満たされていない人、心象風景に深いグラデーションを描いていない人、つまりは器だけの人間にこそ、問題があるのではないか。

先日、七夕の夜、佐治のアストロパークに初めて遊びに行った。鳥取市の教育委員会が運営している施設ということで、まったく期待していなかったのだが、これが予想に反して、なかなか楽しい施設だった。数億円で購入したという天文台では、スタッフの人が熱心に星の魅力について語ってくれた。初めて木星の縞模様を目にす

ることができて、興奮したりした。

印象的だったのは、グッズコーナーに副館長私物のガンダムファイギュアがひっそりと並べられていたことだ。「家に置いておくと、奥さんがうるさくて……」と副館長さんは苦笑いを浮かべていた。これこそ、豊かな「心の闇」だと私は思った。人間が人間らしく仕事をしている空間は、それだけで居心地がいい。

外に出ると、そこには湿気を含んだ七月の「闇」が広がっていて、星の瞬きが雲の切れ間から覗いていた。その「闇」に包まれながら、私は車で山を下った。

追記…これを書いた時点では宮迫や岡本社長の会見は開かれていませんでした。まさか、さらにこじれていくなんて。この原稿が掲載されているころには、どんな状況になっているのでしょうか。

編集部注：

ワクサカソウヘイさん 最近の刊行物

『動物たちの青春白書』 柘出版社 2019.06 本体 一三〇〇円

『ヤバイ鳥』 柘出版社 2019.08 本体 一三〇〇円

定有堂東京支店 その⑦

墨田区の空の下、荷風の魂は宿る

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 東京支社長)

永井荷風を知ったのは高校時代。

父親の書棚で、戦前戦後の『アサヒグラフ』の復刻版を見つけた。「モボ・モガ」「エログロ・ナンセンス」「一億総懺悔」「カストリ雑誌」…夢中になって読むうちに、まるでその時代を生きていたかのような錯覚を覚えた。「天国に結ぶ恋」「ゴーストツブ事件」「もく星号墜落事故」。自分が生まれる前の世相や流行語にやたら詳しい変な高校生になってしまった。

戦後の同誌によく登場する丸眼鏡の洋風紳士がいた。浅草のストリップ劇場の楽屋で半裸の踊り子たちに囲まれ、「大歓迎を受ける荷風先生。時に彼女らの人生相談に乗ることも」というキャプション。

「そういえば、荷風の本があったような…」。書棚を探すと見つかった。「断腸亭日乗」(岩波書店、全七巻)。漢文調の日記でまことに読みづらい。「なんでこんな本、親父は買ったんだろう」

隣りに「墨東奇譚」があった、押入の奥に父親が隠していた野坂昭如の「エロ事師」「浮世一代女」(伝説の娼婦メリケンお浜がモデル)を見つけてすでに読破した私には、エロさは全然もの足りなかったが(笑)、恋に恋するお年頃とあって(夏休み、文豪の書いた恋愛小説を手あたり次第に読み漁った)、玉の井の世界にのめり込んだ。

箱根のターンバイク、日光いろは坂…。関東圏にはバイクの名所が多いので、東京にはバイク持参で着任した。押上の下宿の近くに駐輪場を予約。ところが引越し直前になってダブルブッキングが分かり、東向島の駐輪場に回されてしまった。同じ墨田区内といっても、歩いて三十分はかかる。

「まったくもう…。悪態をつきながら駐輪場に向かう道すがら、東向島はあの『玉の井』があった所じやないか、と気づいた。小説家・永井荷風が愛した遊郭の街、彼の代表作『墨東奇譚』の舞台。その近所に住んでいるのだ…妙な感慨を覚えた。



突然の夕立に、初老の小説家の「わたくし」（たぶん荷風自身であろう）の傘に飛び込んできた娼婦のお雪。

誘われるまま部屋に上がり、なじみを重ねるうちに、彼女から「借金を返しちまつたら、あなた、おかみさんにしてくれない」と告げられる。いじらしいなあ。

なのに「わたくし」は応えず、なぜかぐずぐずしている。やがて彼女の入院を知るが、見舞いにも行かない。娼婦と客の関係を越えるかに見えた二人の交情は淡雪のように消えてしまう……。若い私には、この終わり方が不満だった。「義理にからまれて思わぬ人（お雪）に一生を寄せる事もあるまい」。うそぶく主人公。それは本心なのか。

◇ ◇ ◇
駐輪場からの帰りは東武電鉄に乗ることにした。

東向島駅に着くと、駅名の下に「旧玉ノ井」の表記があった。周辺の路地裏を歩く。同じく玉の井を舞台にした滝田ゆうの漫画「寺島町奇譚」（昔は向島区寺島町だった）に出てくるような、「ぬけられます」とか「ちかみち」の看板を探したが、あろうはずもない。

歩きながらふと、今の自分は澤東奇譚の「わたくし」とほぼ同じ年齢になっていることに気づいた。

「もうじき六十さ」「六十なの。まだ大丈夫（中略）四十にしても若いわね」「私はいくつ位に見えて」「二

十一ぐらいに見えるが、四ぐらいかな」「あなた、口がうまいから駄目。二十六だわ」

今なら、あの終わり方が分かる気がする。自分を慕うお雪を幸せにできるのは、還暦を迎え、先ももうそれほど長くない自分ではない。先の「義理にからまれて……」は、そう無理やり自分に言い聞かせているのだ。初老の男の惑いとあきらめ。

小説は若い頃とはまた違った顔を見せる。

◇ ◇ ◇
新聞社を定年退職した父親は、「中島」という昔、岡山の遊郭があった街に長屋を借りて、本と飲み屋さんまいの生活を送った。女の影もちらついていた。

猛暑の夏、部屋でぐったりしている所を見つけて介護施設に入れたが、あまり会話も交わさぬまま世を去った。死後、書棚にあった「断腸亭日乗」や「澤東奇譚」はことごとくおふくろに処分され、残念ながら手元にはない（たぶん父親への復讐に違いない）。

サンフランシスコ初訪問記

五島 朋子

(鳥取大学地域学部附属
芸術文化センター)

六月末に五日と短い期間だが、初めてアメリカのサンフランシスコを訪れた。サンフランシスコ近代美術館(GEMOMA)で開催されていたスザンヌ・レイシーの初回顧展を見るほか、何人かのアーティストに会うのが目的だった。ロサンゼルスを拠点とする一九四五年生まれのレイシーは、フェミニニスト、著述家、教育者としても活動してきた。DVやレイプの被害者、貧困地区の若者、女性高齢者など、声を上げにくい人々、あるいは社会的に見えにくい問題をテーマに、アーティストならではの創造的な方法で、プロセス重視のプロジェクトをたちあげてきたアクティビストだ。従って、展示もプロジェクトの

ドキュメントや映像記録が多く、半日でも十分に見ることはできないくらいだった。

サンフランシスコについては、恥ずかしながらほとんど予備知識がなかったが、返って現地での体験はどれも印象深いものとなった。例えば、サンフランシスコ・プライドという、毎年六月最後の土日に開催されているLGBT(性的少数者)の祭典があることを知った。世界各地で行なわれているこのようなプライド・パレードは、LGBTの人たちが偏見や差別を受けることのない社会の実現を目指す社会運動でもある。サンフランシスコ・プライドはアメリカ最大規模で、各地から一〇〇万人を超える人が集まるといふ。レストランもホテルも街路もLGBTを象徴するレインボーで彩られ、大小のフラッグやレインボーを使った様々なグッズを販売する屋台も出ていた。一日目の市役所前広場のステージイベント、二日目の通りで行われるパレードを垣間見た。ステージ出演者、パレード参加者、そして観客が纏う、LGBT文化を讃える思い思いの衣装や化粧に目を奪われる。かなり露出度が高い人もいて、目のやり場に困ることもあったけれど。

また街なかでは、大勢の小人症の人たちを見かけた。LFAという名札をつけているので調べてみると、低身長の人々とその家族に支援と情報を提供する「リトル・

ピープル・オブ・アメリカ」というNPOがあり、その全米大会が近くのホテルで8日間にわたり開催されているのだった。NPOのホームページは、小人症の人たちにとつて生きやすい社会を実現することが使命と謳う。

香港からの移民でアーティストのレニー・ユンさんのお話もまた、社会の周縁に追いやられてしまった人々の声を取り戻そうとするものだった。ユンさんは、サンフランシスコの歴史で語られない中国人移民の姿を、文章や映像、パフォーマンスなどマルチメディアで表現し続けている。例えば、一九世紀終わりには、サンフランシスコ湾でエビ漁を営んだ中国人移民コミュニティのこと。母国の技術を継承しながら営まれたエビ漁の実際、反中国運動という迫害によって歴史から消えた経緯を、サンフランシスコ在住の中国系移民へのインタビューのほか、歴史学者、科学者、船乗りとの学際的な調査を経て明らかにしていく。プロジェクトの一部は、多世代の中国系移民が参加する演劇作品として結実した。英国領下の香港に生まれ、二〇代でサンフランシスコにやってきたユンさんは、中国人としてのアイデンティティを、忘れられた中国移民の声を甦らせることで確かめようとしている。

SFMOMAの向かいに建つイェルバ・ブエナ・アート・センター(YBCA)のチーフ・ディレクターであ

るジョナサン・モスコニーさんの話も、これらアメリカの様々な社会運動の実践と通底する。YBCAの役割は、地域コミュニティの課題を、地域の様々な組織と協働することで顕在化させ、アートを通じて社会変革を起こすとともに、サンフランシスコ市の政策に変化を与えることだという。モスコニーさんは、演出家や劇場の芸術監督としての長いキャリアののち、現職に就いている。我ながら迂闊なことだが、彼の父親がハーヴェイ・ミルクとともに射殺されたサンフランシスコ市長だということに気がついたのは、面会後のことだ。ミルクはゲイであることを明らかにして、全米で初めて市会議員となったことで知られ、在職中に同僚の議員から射殺された。その事件は、ドキュメンタリーや劇映画でも描かれている。

女性、高齢者、移民、ホームレス、障害のある人、性的少数者……社会の周縁部に追いやられがちな人々が声を上げ、社会を変革していく。多様な声が響き合うのがサンフランシスコという街なのだ、今回の短い滞在は教えてくれた。

言訳

鳥居 貴彦

(開風社待賢フックセンター)

自分の店を準備していた数ヶ月前、「コンセプト」という言葉がほんとうに苦手だということに気づいた。「どういうコンセプトのお店なんですか?」とか聞かれても答えられない。くる人が決めたらいいやん、とか思ってしまう。それではいけないとはわかってる。人はコンセプトのある店に行きたくなるのだからということはよくわかってるつもりだ。堂々と自分のやりたい店を語る人もみてきた。そういう人はかっこいい。でもダメなんだなせか。

苦し紛れに口をついてでた言い訳がある。「長谷川書店みたいな店に何十年後かになってたらいいなって思いますがねえ」。ますますできるとは思っていない。何十年

後かに。それで伝わるんだろうか。伝わらない気がする。

阪急電車の京都線、水無瀬駅。各駅停車しかとまらない小さな駅。ホームから改札に降りる階段の途中からもう長谷川書店水無瀬駅前店が視界に入ってくる。改札から徒歩数秒。幼年誌が積まれたマガジンラックとアニメ絵本の回転塔。ガラスの自動ドア。ごく普通の本屋の景色。

店のあり方と長谷川さんのことについては、石橋毅史さんの『本屋な日々 青春篇』にほとんどのことが書いてある。それ以上のことは書ける気がしないのでぜひご一読ください。

初めて行った日からも変わっていない佇まい。それは間違いないのだが初めて行った日はどうしても思い出せない。いつか行かなければいけない店だった。当時、僕は二駅となりの町で書店員をしていた。長谷川書店の話聞くことは一回や二回ではなかったはず。いろんなひとがいるんなことを言う。いつかかならず行かなければいけない店になっていた。

「あー。先にやられたなあ」みたいなことを言われた

気がする。それが一回目の訪問だったかどうかはわからない。でも初対面でそういうことを言う人だ。店長とともに店をまわしている長谷川さん。だいたいボーダーのシャツ。自分もそっちに行かなあかんと思つてた、というようなことを話したのだとおもう。お互いに意識し合っていた。ああそうか、と思つた。

なんだか通ううちに不思議なことがおこつた。本棚をはずしてピアノを入れるという。なにをいつているのだろうか。それは「こうすれば店が良くなる」とかいうことでも、「こうしたい」という長谷川さんの内から出てきたものではない、ということだけはわかつた。ピアノを手放さざるを得なくなった人がいて、それを引き受けようとする人がいて、その様々をすべて長谷川さんが引き受けようとしていた。なぜそんなことを。わからない。作業は徹夜になる。でもやらなければいけないと考えているらしかつた。その後も同じようなことがなんども起こつた。町の人が店をつくつていて。あきらかに僕の思つていた店と客の関係ではない。参加している。参加させられている。

気づくと自分も巻き込まれていた。店内で読書会を開くことになっていたり、クモの専門書を一生懸命読むこ

とになっていたり、徹夜で本棚を運び込んだり、チョコレートをもらつたり。そのすべてが「巻き込まれている」としか言いようがない。かといって長谷川さんが何かを主体的に動かしているのではない。その後ろにもっと大きなものがあつて、気づくとみんなが渦の中にいる。

「店」なのだろうか。「人」なのかもしれないな、と思う。誰がやつても長谷川書店になるわけではない。明日からここ任せたよ、と言われるととても困る。ちよつとうれしいけど。では長谷川さんが待賢ブックセンターの店番をしていたらどうだろうか。それもちよつと違う気がする。ああはならない。では梅田の紀伊國屋にいたら？ それも違う。だいが違う。定有堂にいたらどうだろうか。それはちよつとありなのかもしれない、といまふと思つた。

何十年後に長谷川書店のようになっていたらいいな、というのはいさだか言えない。今すぐできることもある。何十年たつても近づけない気もする。

「開風社 待賢ブックセンター」 2019.03.29 オープ

京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町818

ホーチミン報告 ② ー ホーおじさんの願い ー

芝野 浩貴

(地球探検家)

『戦争史をたどる2300キロ』の本のタイトルの示す距離は北ベトナムから南ベトナムの端から端を意味するが、著者の石川文洋さんは、昨年7月宗谷岬から故郷の沖縄まで徒歩での日本縦断を試みた。11ヶ月3500キロの走破を、平成から令和とまたぎ、6月8日に完遂された。(81歳2003年に続き2回目らしい。(日本縦断 徒歩の旅 65歳の挑戦、岩波新書 30代の時の従軍カメラマンとしての歩きを思い出しながらの苦行だったと推察する。従軍とはいえ、北南関わず、立場によらないニュートラルな取材で定評があり、武力が伴えば侵略であると言いつついた。

日本列島とベトナム全土の形は似ている。首都、ホーチミンは北海道で、ホーチミンは九州。港湾都市ダナンは仙台のあたりか。初めてベトナムを訪れたのは4年前のダナンである。ダナン港ハーバーフロントセンターに着いてから、元米軍基地に建っている1件2000万円の高級別荘マンション

を横目に移動した。社会主義だから土地は国のもので、国の命令に反すると墓の移動でも刑務所行きであることや、平均月収は3〜5万円なのでチーズやバターがいかに高価なものかを聞きながら、市場のある OLD CITY を目指し、生々しい肉やフオーの素、ドラゴンフルーツなどの亜熱帯の果実など嗅覚を研ぎ澄まして見歩きしたので、ベトナム市場やバイクの多さで驚くことはなかった。ホーチミンでのバイクの量は半端なく多く、公害問題にもなるので地下鉄建設が急がれている。ちなみに、地下鉄は日本企業が関わっており、日本人通りといわれるレロイ通りにはベトナムと日本の国旗が掲げられている。この辺りにはファミリーマートもある。ホーチミンはホテルの数が多く観光客は宿泊には困らないうえ、ワイファイもいたるところ通じる。2016年7月に高島屋も開業し、2018年3月には東南アジアで一番高いビルのランドマー 81 (461.3m) が建設されているので、2000年代にベトナム旅行された人も、景色が一変してることと加速する都市化にびつくりされるだろう。ベトナム2回目となりベトナム市場の近くに宿をとった私は、日本橋 (OLD CITY) でなくて東京から移住している教え子と再会して、職場の近くであるというビテクスコフイナシヤルタワー (266m) で市内で2番目に高いから、今のホーチミンの実情を聞いた。サイゴン川の蛇行が一望できる。

- ・雨季だから毎日雨は降るが1時間以内にはやむ
- ・サイゴン川に沿って1区から2区(タオディエン)へとビル建設ラッシュ鋼材消費が東南アジアで最大 年6〜7% GDP 伸び率が続く数年後に

は原宿・青山のようになる。2区は欧米人街で世界各国大使館が集まっている。

・地価はどんどん上がり投資家の対象

・地下鉄完成の延期は寄付金の流用と関係あり

・平均月収2万円ですべて都市部大手管理職は10万円

・ホーチミンの教育事情(インタースクールと日本人学校の違い)

・ビナサンとマイリンタクシーは安全だが、ベンタイン市場の周りはスリが多い。何か調べるときは道路を背にしないとバイクにひたたくられるなどの話をしてくれた。その後彼女はUBERのバイク版のGRABバイクタクシー(緑の服が目印)を呼び出して颯爽と去っていった。仕事中はフリーピンのメイドに子供を預けているので仕事終わりから子育てへ切り替える隙間時間での再会だった。「日本と違って子育てに優しい」という言葉が印象的だった。

タワーから街を俯瞰できたので、方向に迷ったら、タワーとその時に見える高いビルを結んだ方向で東西南北を確認して歩き回った。

前号の戦争博物館の他、ドンコイ通りの市民劇場、中央郵便局(オル

セー駅をモデル)、聖母マリア教会本家のノートルダムは焼失と動植物園(アジア最古の動物園)、グエン・フエ通りのラッキープラザ、本屋、

ホーチミン像とホーチミン市博物館、図書館などを繋いで隈無く歩いた。

南にはマングローブ保護区、南西にはミトーなどのメコンデルタもあるが、そこまで行くことはなく、サイゴン川沿いを歩いたが、特記すべきはホーチミン博物館だろう。ホーチミンはマルクスレーニン主義に収まらない広い人類文明への視座を持っていた。「孔子は道德の修養、キリストは高い博愛心、マルクスには弁証法、孫文には三民主義があり、これらの人が一堂に会したら仲良くしただろう。これらの方々の弟子になりたい」と述べている。ホーチミン思想は儒教・仏教・道教も評価して二つの世界からの脱却を目指した。ベトナムは玄武岩の土地からコーヒーを作る。フランス統治で始まったベトナムコーヒー。フランスが組合せ式フィルターを使用しなくなったので、ベトナムだけの特有のコーヒーとなった。生産量世界2位。食糧自給率100%。石油・石炭・天然ガスも自給可能。年間100万人のペースで人口も増加し、平均年齢が30歳にも満たないこの国の若い国民がどれくらいホーおじさんの願いを知っているのかはわからない。アメリカのドミノ理論はベトナムが倒れると日本まで共産圏になるというものだったが、倒れ行く日本を起す逆ドミノはどうすればいいのか？

スクールの時間帯はハイランズコーヒー(ベトナムのスタバなどで凌ぎながら、タンソンニャット空港まで歩き、帰国してからベトナム思想本を読んでみた。ベ平連↓鶴見俊輔↓ハンセン病↓中村哲。石川文洋↓ユージン・スミス↓こぶし館。山崎博昭↓加藤典洋↓鶴見俊輔↓交流の家。

この連想は、『新しい風土記』朝日選書、鶴見俊輔編著と『このち』の現場でとまごう』岩波書店、徳永進著を読めば繋がります。

林檎喰いの受難

ムラカミ ヒロミ

〈ライオン・ブックマン〉

西瓜、メロン、桃、枇杷、無花果：スーパーマーケットの果物売場は花盛りである。しかし、反比例して、この時期になると、林檎の赤が冴えなくなる。

林檎喰い（というポルノグラフィがあつたが、本文は全く関係ないので安心されたい）にとつては、受難の季節である。

林檎の最盛期は秋から冬。春から夏は一部の品種を除けば、採れない。露地ものは姿を消す。

もつとも、林檎そのものが店から消える訳ではない。一年中食べることはできる。ただ、出回るのは冷蔵もので、玉も小さく、味も今一つ。実の黒変も出る。種類が少ない上、値段も高い。夏の終りになって、青さの残る小振りの（つがる）が並ぶようになって、漸くホツとするのである。

かつて、貿易自由化という名のアメリカの横車の下、同国産のリンゴの輸入が解禁された経緯がある。もう二

十年以上前の話だ。どこのスーパーにも、あの独特の形状のリンゴが溢れたものである。あれを見て、デイズニーの「白雪姫」に出てくる、継母女王の毒リンゴは、誇張でも何でもなく、細長く、尻が尖った形が正にアメリカのリンゴであることが分かったのであつた。（尖ったリンゴは、実に皮が剥きにくい）まあ、どの道、毒リンゴには違いなかつた訳で（ポストハーベストとかね）、日本人の嗜好に合わなかつたということか、はたまたお義理は果たしたということか、一年経つや経たずやで姿を消した。

林檎を必ず毎日食べるようになったのは、一人暮らしをするようになった頃からだつたように思う。巷間伝え聞く「一日一個の林檎は医者知らず」というどこぞの国の諺を信じたからだ、その割に、年二回は必ず風邪を引いているので、あれは特定の病種に限定されるのか、或いは丸一個は多すぎるため半分しか食べないのが摂取量不足で効能の臨界に達しないのか、未だによく分からない。

近頃は、当地でも林檎の栽培が始まり、見映えは今一つながら、大きさや味は十分満足できるものが供給されるようになったのは慶賀に堪えない。自邸の庭に一本だ

け植え（枝が横に広がるので、結構広い面積を取るのがある）、毎年収穫しているお宅もある。誠に羨ましい。ほぼ（ふじ）一本鎗なのが寂しいが、今後は種類も増えることだろう。

『りんっこって、どんなくだもの？』（安田守著、岩崎書店、二〇一七年）という、小学生の調べ学習の本があるのだが、これが実に贅沢な、痒い所に手が届く、行き届いた編集のスグレモノ。子供だけに読ませるのは勿体ない。

歴史や栽培技術は当然ながら（これによると「林檎」は「和漢三才図絵」に見え、ワリンゴを謂うそうな）、白眉は国内種約百十種、外国種約七十種をオールカラーで紹介していること。しかも、国内種は縦割りの断面図もあり。果肉の色がよく分かる。また、写真が美味しそうに撮ってあるんだ、これが。著者の「愛」を感じますね。

小生の望みは、このリストの林檎を、端から順番にひとつずつ日替わりで食べてみたい、ということに尽きる。長野か青森に行けば食べられるだろうか。取り寄せは難しかりうな。

「ブルムリー」だか「グラニースミス」だか、名前は

忘れてしまったが、菓子作りの得意な知人が、イギリス原産のアップルパイ用の林檎を手に入れるぞ、と息巻いていたことがあった。何でも、栽培量が極端に少なく、販売期間も短いため、即完売という人気種なのだそうだ。菓子用の林檎といえ、ば、「紅玉」のような酸っぱい品種がよい、くらいの知識しかない身には、「林檎も奥が深いの〜」と思つたことだった。

目下の所、お気に入りには「ふじ」と「秋映」。甘味と酸味のバランスが程良く、固くて、果汁の多い種類が好みである。「ふじ」はありきたりだが、飽きが来ない。究極の完成形、という気がする。「秋映」は、黒光りするような果皮の色と密やかな香りが慕わしい。

是非、試してみたいのは「ガラ」「冠輝」「こうたるう」「サマーデビル」（果肉が赤い）「メイポール」（同）など。外国種では「テトフスキー」（ロシア産）「フロリーナ」（フランス産）。同書を見ると、外国種は圧倒的にアメリカ優位。流石に（ジョニー・アップルシード）の国である。次いでイギリス。アジアはインドと中国に一、二種だけ。してみると、日本の百種超えはもはや奇跡的ですからある。元より、先人達の営々たる努力と辛苦の賜物なのであるが、これは凄い。

坪井日記 ⑬

齊藤仁昭

(長崎書店)

7月某日

22 時過ぎにチャイムが鳴り「アマゾンです。」とドア越しに言う。何て時間だと思しながらも荷物が今日到着だとは知っていたのでドアを開けたら息を切らして汗だくの七十前後に見えるおじさんが居た。しばらく何も言わないので、何処かから逃げてきた人なのか、危険な人物なのか、それともそれ以外なのかの判断ができず、混乱した。こちらが固まっていると再度「アマゾンです。」と言う。「あ、う、はい。」くらいしか返事ができなかつたが、向こうも何もしてなかなか荷物を渡してくれないのでやっぱりアマゾンを装った人なのかと思っていたら、「間違えて荷箱を開けてしまいました。」と。彼が右手に抱えた荷物を目をやると確かにガムテープがカットされて段ボールの蓋が開いていた。混乱してしまっている上に、何故開けたのか理解できなかったことと、荷物は子ども用の食事用の材料だったので咄嗟に「そそそそれは受け取れません。」と追い返してしまつた。ドアを閉めた向こうから「すみません。わかりました。」と言葉とは裏腹な困惑した声が聞こえた。

自分は部屋に戻り、おそろくおじさんも引き上げたのだろうが、ソファに座つて考え込んだ。釈然としない。こんな夜中まであのおじさんは働かねばならんのか。働かされているのか。疲れて間違えて箱を開けたのかな。開けちゃつた段ボールを持ち帰って上司や発送二元と面倒なことにはならないだろうか。受け取れば良かったようにも思うけどやっぱりそれは無理。年寄りが遅くまで働かないといけない世の中なんていやだ。悲しい。みんな選挙行こう。僕は先日期日前投票に行きました。(翌日荷物のステータスを見たら「到着済み」になっていたのでもそりやないよと苦情を伝え返品扱いにしてもらいました。)

7月某日

知人の娘や、5歳の姪っ子からパブリカと言う曲が流行っているらしいと聞き YouTube で息子にも聞かせてみたら楽しそうにしている。が、なんだか曲調が自分の好みではないのでビートルズでも観せてみようと思つて検索、視聴。まんまと自分が興奮してしまつた。中高生の時に<HSで繰り返し観たような映像がすぐくクリアになつてアップされている。やっぱりかっこいい！ロックつてあんまりもう流行つてないのかもしれないけれどぜんぜん死んでないですね。

7月某日

機嫌をそこねたり怒つたりすることを熊本弁で「はらかいた」と言う。立腹の意味が含まれるので「腹かいた」だと思つていたのだが、妻に聞くと「はらかいた」とも言うらしい。腹がはりに変化するのは腑に落ちないので腹ではないのだろうか。様々な熊本弁を収録して解説した当店のロングセラー「ななな、ななななな 熊本弁コージ苑」(工事郎著、熊

本日日新聞社)に「はらかいた」も掲載されていたが「腹」かどうかはわからなかった。今度図書館で調べてみることにする。目次から熊本をピックアップしてみます。さしより、むぞらしか、うもなか、ほんなこつね、きてはいよ、がつばつす、ぬし、あくしやうつた。わかります？

本居宣長が熊本を訪ねた際、古くからの言葉が残っていることに驚いたというエピソードを何かで読んだ気がしますが、古い語源が多いのでしょうか。

*

だからそう言ってるんだって

そこで聞こえる声が

だらしなく続く長い昼過ぎに

終わりを告げたんだ

だからそう言ってるんだって

まるでモーゼの様な

瞬間がいつも頭の向こうで

起り続けてんだ

だからそう言ってるんだって

暗く寂しい夜の

部屋ん中ひとりワツとなる時にも

聞こえて来たんだ

だからそう言ってるんだって

やつと見つけた恋が

散々な結果に終わったときにも

聞こえて来たんだ

僕の好きなあの歌も

漫画のようだと

君がいつも笑う

だからそう言ってるんだって

君の髪から出てる

小川に乗ってどこまでも遠く

泳いでいけるんだ

だからそう言ってるんだって

あのヒマヤの空で

第三の目が開いたとしたって

関係ないんだ

漫画のようだと

コンガのように笑う

智頭町から始まって



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

幼い頃から「ちづちゃん、ちづちゃん」と呼ばれてきたので、鳥取にご縁ができてからは智頭町が日本で一番親しみを感じる町になった。

数年前に鳥取市に仕事で週に一度通っていた時、鳥取自動車道は便利で料金はかからないけれど、ゆったりと風景を楽しみながら走れる53号線が好きだった。岡山方面へ行かないようにだけ気をつけて、途中から53号線で志戸坂トンネルを抜けて兵庫に帰ることが楽しみだった。「ゆっくり走ろう、因幡街道」の大きな文字の標語が毎回目について、「そうだ、そうだ」と思いながら運転していた。29号線で若桜町を通って戸倉峠越えも好き

だけでも、対向車が全くない時は寂しく感じることもあり、いつの間にか遠のいてしまった。

当時、智頭町で車を止めて石谷家住宅を春と秋に訪れた。何となくぶらぶら歩いただけの時もあった。智頭町出身の鳥取環境大学の学生さんが、ロシアからの学生たちを一日案内してくれた時には、私も一緒に歴史や伝統文化を知り、諏訪酒造見学では杜氏の方だったと思うが、酒造りの工程を丁寧の説明して下さったのがとても印象に残っている。カーナビ頼りでも運転に自信のない私にとって念願の「タルマリー」に到着し、初めてそのパンを口にして、「生きてる！（私ではなくてパンが）」の感動は忘れられない。

その頃から板井原集落というところに古民家カフェがあることは知っていた。いつか行きたいという夢はあったのだが、道幅がとても狭くて通れないだろうし、途中で帰ってこれられなくなったら、という余計な思い込みと不安の方が先立って諦めていた。その古民家カフェの名前は「歩とり」。全国の古民家カフェを訪ね歩く「フルカフェ系ハルさんの休日」というテレビ番組で六月に紹介されていた。私の一番の関心はそこにたどり着くまでの道がどうなっているかであったが、三世帯しかない限

界集落とされている村の様子、百年前の古民家建築について、鳥取弁で「たつて」とは「閉めて」の意味、カフェに集まってこられる元住民の方々のお話、そして素敵な女性店主と手作りランチ、一度にたくさんの方のことを知ってしまったけれど、何も知らずに行くのとはまた違ったものになるだろう。これで実現しそう。「板井原(こうご)の味を楽しみに。」

こうして思いっきり智頭町についての思いを今回の38号に書こうとしていたら、新聞のテレビ欄に目がいつてしまった。何と今度は用瀬の古民家カフェ「川の hotori 用瀬」が紹介されるではないか！38号まで待っていられないので書くことにした。用瀬に寄り道して用瀬インターから鳥取自動車道に乗ることもしばしばあった。興味のわく町のイベントを見に行ったりしたので、テレビに映る町並みがとても懐かしい。このカフェでは地元の人たちが協力して百年前の味を復活させた「あんころ餅」と用瀬茶のセットをいただける。用瀬茶は何かのイベントで鳥取環境大学の学生さんが熱心に説明して勧めてくれた、ほうじ茶とほうじヤーコン茶を思い出す。毎日のように飲んでいた。番組の最初から最後までこの古民家に誰が住んでいたのかが謎だったので、私も「すっごいお金持ちだろうな」と思いながら見ていた。なるほど、

造り酒屋の別宅だったそう。密談も行われたであろう和室で、今は「流しびな」の手作り教室が開かれている。この古民家の改修やあんころ餅の復活、さらにはまちづくりの活動を資金集めから行っている若者が画面に映った。鳥取環境大学の卒業生だった。

鳥取で働いていた三年間で鹿野町をはじめ智頭町、用瀬町とお気に入りの町が次々とできた。県外からは三人の友人しか観光に来てもらえなかった。友人の数が少ないので三人は私にとっては成果と言える。毎年一人。季節も違っていたが、感想は同じ。「鳥取の人つとつても優しいよね」だった。ほんとになんかい人ばかりに思えてくるし、ふと今後、人が減っていても、いい人たちが外から人を呼んでくるのではないかと、そしてキーワードは鳥取環境大学のような気がしてきた。

町も人も私を待っていてくれる、と信じて鳥取へ出かけよう。湖山池のほとりに「パン工房ほとり」があることも知った。今度は「ほとり巡り」をしてみたい。湖や川のほとりで水面を見ながら、せせらぎの音を聞きながら、ゆったりとした美味しい時間を過ごしに鳥取へ。あら、「ほとり」の中にもちゃんと鳥があった！

鳥取あれこれ その三十六

内田克彦

(地域研究家)

廉三は一八八八年生まれ、矢部は一九〇二年生まれであり、矢部にとって廉三は郷土の大先輩であるにもかかわらず「悲観した」とはどういうことか。廉三は回顧録を残しておらず、その意味合いがよくわからない。二人はこの時点ではお互いの面識がなかったのだろうか。先日、『高木惣吉 日記と情報 上』を県立図書館から借り出し、同時期のところを見ていたら、これまで知らなかった、非常に興味深い記述があった。

昭和十三年一〇月三日

〈専任外相下馬評。松岡〔洋右〕、白鳥、佐藤〔尚武〕、有田、斎藤〔博〕、重光〉

昭和十三年一〇月五日

〈外相詮衡行悩、総理兼撰ニテ進ム様子。次官二沢田〔廉三〕公使。〉

矢部貞治は詳細な日記を書いており、『矢部貞治日記』として、全四巻が発刊されている。一九三七年五月二八日から始まり、一九六七年五月四日、亡くなる三日前までの膨大な記録である。古井喜実との関係を調べるため、古井の記述がある個所をポツリポツリと抜き書きしていったところ、澤田廉三についての記述が突如出てきた。第一次近衛文麿内閣のとき、宇垣一成外相が一九三八年九月三〇日付けで辞職したため、近衛がとりあえず外相を兼務し、後任を誰にするのか検討していた頃である。

昭和十三年一〇月五日

沢田廉三が外相になったといふ風に聞いて悲観したが帰って夕刊を見たら次官だ。

結局、一〇月二九日に有田八郎が外相に就任するのであるが、一一月三日の項に「極秘情報」として次のように記されていた。

(略) 四、有田外相就任経緯

宇垣外相辞職後四相会議ニテ有田氏ニ後任外相内定シ

居タルトコロ、白鳥推薦運動抬頭ニテ両案共行詰レル
コトハ既ニ周知ノ如クナルガ（略）陸軍ト関係ヲ考慮
シ松岡ハ如何トノ話モ起リシモ松岡ニ対シテハ各方面
ニ不評少カラザルノミナラズ最モ重視スベキ西園寺公
ノ意見ガ

『（略）松岡ハ會テ巴里デ使ツタ覚ガアルガドウモ不
安ガアル』トテ実現望ナク首相モ選択ニ窮シテ沢田ハ
如何トノ話トナレリ。

之二対シ沢田氏ハ素ヨリ食指大ニ動キシモ

『（略）沢田如何ニ手腕アリト雖モ決シテ国民ヲ張目
シムル事績ヲ拳グルコト至難ナルハ明白ニシテ況ンヤ
陸奥、小村ニ匹敵スル人物ニアラザルニ於テヲヤ。

（中略）沢田氏ハ仮令陸奥、小村ニハ比スベカラズト
スルモ兎ニ角外務新進ノ人材ナリ、然ルニ大臣トナル
コト早ケレバ早キ程瑕瑾（キズ）ガ付クコト必定ニシテ
斯クテハ将来益々外務人材ヲ失フ原因トナルベシ』ト
ノ意アリ（後略）

矢部貞治編著『近衛文麿』には「外相が有田に落着く
までには若干の経緯があつた」として、次のような記述
がある。

近衛は原田に

「事によつたら外相は澤田でどうか」
とも言つた。

このとき他の候補を押しつけて廉三が外相に就任して
いたら、廉三のその後の人生は全く異なつたものになつ
ていたに違いない。

石射猪太郎著『外交官の一生』には、「堀内前次官と
沢田新次官との事務引継ぎのさい」各局部長と大臣官房
課長が次官室に呼び集められたときの状況が記述されて
いる。

新次官からもよろしく頼むくらいの挨拶を予期して
いると、意外にも沢田次官は、一同に向つて一場の訓
辞を始めた。時局の困難を詳説し、これに対処するに
異常な決意を要するゆえんを力説した。訓辞というよ
りも大演説であつた。

廉三は、一九三八年一〇月一五日から翌年九月二六日
まで外務次官を務めた。外相は近衛（兼任）、有田、阿
部信行（兼任）、首相は近衛、平沼騏一郎、阿部である。

フランクとブルックナー (2)

秦阜梅林 (やすおかばいりん)

(楽人)

今回はそれぞれの解釈史を辿り、引き続き二人を視て行かう。

I

フランクには、例へば「モソナタ第一楽章全篇に漲つてある余りにラテン的な」此処だけ見ると確かに印象主義かと思ふばかり、楽想もある、二長調四重奏然り。汎フランス的傾向、純ベルギー的体臭も全てひっくるめ。そしてブルックナーには、奥・南独的なカトリシズムや田園描写と云つても創造主の造り賜ふた大地讃礼といった信仰告白へ一目散に向かふと云つた大切な要素、此らは時代背景的に「国民楽派的」側面のある事も否めなひ。

II

それを踏まへ演奏されたフランクならば？ モントウ、ミュンシュ、パレー、アンセルメ、ジュリーニ、カペー、q、

パレナン q ↓現在のデュトワへと云つた所謂「正統派」解釈。一方ブルックナー側はシューリヒト、ベーム、セル、ヨッフム、カイルベルト、マタチツチ、ベイヌム、ケルテス、フィルハーモニア q と云つたリストが挙げられやう。

III

同じ正統派でも世評頗る高いヴァントのブルックナーは、極めて北独風でプロテスタントの香りが強く、チェリビダツケの其れは「禅」空間に譬へられ掃き清められた静けさの漂ふ、カトリシズムを棄て去つた空間に己の信仰告白を反映してゐる。一方三度録音を重ねたプラハ q のフランクは？ と云ふと、ラテンの雰囲気なぞまるで漂はなひ純ゲルマン的アプローチに終始し、大バツハに遡るフランクの敬虔さの本質を突ひて愛しい。

IV

更にフルトヴェングラー、メンゲルベルク、クレムペラー、クベリーク、バルビローリといった一連の「ゲルマン風」フランキスト達のアプローチは、篤い信仰よりは寧ろフランクの「浪漫派として」の在りやう、普遍性をこそ示唆し同様にブルックナーに於けるムラヴィンスキー、オーマンディ、スヴェトリャーノフ等それにヴァルター、クレムペラー、テンシュテットと云つた所謂マラー党の些か錯誤的なものも加へ、カトリシズムと奥・

南独風2つの重要ポイントをまるで欠いた非正統派ブルックナー解釈には、さういふ味あひの替はりに純粹器楽としての美学が剥き出しに謳はれてゐて、こんな祈りのドラマティックも可能だったか？とブルックナー解釈の幅やら高さを教へられる。此はその儘シヨパンやチャイコフスキー、ブラームス・誰に置き換へても構はなひのだが、絶対的抽象である器楽の解釈・表現に於ひては、「正統派」に加へ非正統的なアプローチにもその作家の特性を、より客観的に解り易く伝へる可能性が極めて高い¹¹狭義に云ふ、正統的な属性や特徴ばかりがフランク、ブルックナー解釈の本質では無い！と云ふ真実がある。例へば作曲者の、全く想像だにできなかった「新たな解釈」に驚愕する！といふ現象の充分起り得る余地がある訳だ。

V

「ハチャトリアン・カペル」と云ふ言葉がある。この若い米国人の極めてブリリアントな協奏曲解釈にはアルメニア・オリエント風エキゾシズムとは無縁な、曲本来の魅力が溢れてゐて往時おそらく一番吃驚したのはアラム其の人だったに違ひなひ。「俺、こんな曲書いたの?!」さういふ驚きはフランクやブルックナー作品にもいつても充分起り得る。幾ら坊さんが憎く、抹香臭ひ其の黒い式服を鯨切りにしたところで、込められた作家の祈り

は消へ無いのである。

3

今回の二枚

C. フランク交響曲ニ短調 j. バルビローリ指揮チエコフィルハーモニー (Rec. 1962. 03. 23 ~ 25 プラハ、ルドルフィースム) A. ブルックナー第7交響曲ホ長調 (883) ムラヴィンスキー版 E. ムラヴィンスキー指揮レニングラードフィルハーモニー (Rec. 1967. 02. 25 レニングラードフィルハーモニー大ホール) イヴ盤



(画 A・T)

猫の一生

土質 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

一昨年、十四歳で死んだ犬に、「犬の一生」という文章を書いて追悼した。先月末、下の娘が一歳の時に我が家に来た猫が二十一年の生涯を閉じた。

二十一年というのは、そのまま我々家族がカリフォルニアからミシガンに移り住んだ歳月である日、始めて数日しか経たぬ仕事から帰宅すると一歳の娘の部屋の箆笥の下に二匹の仔猫が隠れていた)、当座入居した借家の地下に、恐らく先住家族の一组が日本人だったのであろう、日本の運送会社のロゴ付き段ボール箱が捨て置かれており、当時五歳であつた長女による、雄の虎猫ヤマトの命名のインスピレーションとなる。

因みに雌の片割れレイチェル(貰つてきたネコ婆さんによると姉と弟らしいが、彼女のネコ屋敷には常に数十匹の猫が群棲しており、これは極めて怪しい)は、二〇〇七年、日本の本社勤務時に Fatty Liver Syndrome (脂肪肝症候群) で死んだ。

犬猫の獣医のレベルでは、どうもアメリカの方が進んでいるように思われる。当初は原因も特定できず、名古屋中の獣

医を尋ね、ここは恐らく最も評判の名医、というところでも、家内がインターネットで手術の手番を調べ、日本語に訳して教授する始末。治療費は嵩み続け、八十万を超えた辺りで、そろそろ上限を設定すべきではないか、と恐る恐る進言すると、上限というならアナタの錦(名古屋の盛り場です)の飲み代にこそ上限を設定したらどうか、と予想通り家内の逆鱗に触れてしまう。高額医療の甲斐なく死んでしまふのだが、最善を尽くしたい、という家内の気持ちも分からぬではない。しかし、アメリカに居れば助かつたであろう。可哀想なことをした。

しかし、「姉」の死はヤマ(愛称です)にポジティブと思われの変化をもたらした。英語では、誰某の Personality が *Person* する、といった言い方をするが、これは個性や自我が開花する、といった感じか。それまでレイチェルや犬(Paters)の存在に、小兵ということもあつて影を潜めて、どうか居るか居ないか分からなかったのが、団欒の際、家族然として *Paters* が居ても、ネコ代表です、といった感じで自分もカウチで人に挟まつて寝そべったり、家内の膝に乗りに来るようになった。しかし主張とか権利意識とか、そういうものは全く見当たらず、小さくて飄々としていて極めて好ましい。その感じは老いても変わらず、猫の笠智衆みたいであつた。

家族は二年の帯同を終え、ヤマを連れて(犬は貨物室で運

ばれる為、輸送時期に制限があるので、暫くの間僕と残った一足先に帰国したのだが、家に戻った途端、様子がおかしくなつたらしい。

家人は、最初は環境の変化による興奮と思つていたらしいが、家中を理由もなく全速力で駆け回る、食事は通常の倍以上貪り喰う、庭に出すとあらゆる植物を見境無く(枯れていても)齧る、とハイパーなことこの上なく、獣医に連れて行くと、Thyroid cancer(甲状腺癌)と診断された。治療方法は放射線物質を内服するのだが、この一錠が約三十万近くしたらしい。飼い主が払うと踏むと、法外な価格の医療を勧めてくるのは洋の東西を問わず、ということか。投与後三週間は放射性が残存し、家に連れ帰ると家族が被曝するので入院しなければならず、その間病室に出入りする獣医や助手は放射線防護服を着用して、と大袈裟なこと甚だしい。見舞いに行つて、扉の二重窓から覗くと、薄暗がりではヤマはボオーつと青白く発光していたそうだ、というのは嘘ですが。

この放射性物質には発癌性があり、寿命の短い獣にのみ使用可、と何だか荒つぽいが、二十一まで生きて死因は膵臓癌、と微妙に釈然としないが、まあ他に選択肢がなかったのであらう。

二年前に Patterns が死んだ後も、既に後期高齢に達しながら、個性の深化がまた少し進んだようで、上手く表現

できないのだが、情感的にはヒトとの距離が更に縮まった。これは飽くまで私見で、笑われるので誰にも云わなかったけど、周囲に犬猫が居る間は払拭できなかった、自分はこれらと同類かもしれぬ、という一抹の疑念が彼らの不在でやっと晴れ、ようやく人心地が着いた、ということかもしれない。

犬と異なり、猫は車が苦手で、通常はケージに入れていても喚き散らしているのだが、衰弱し、起き上がることもできなくなつて獣医に連れて行く際、家内が胸元に抱いてやると大人しく車窓から外を眺めている。如何にも興味深そうな眼つきが自然で、一瞬、家に引き返そうかと考える。そうすれば、何事もなかったように今まで通りの共生がいつまでも続くに違いない。大嫌いでいつもなら逃げ回る治療室でも、僕に抱かれ、安心そうね、と、このような情景は見慣れている筈の看護婦も目を潤ませている。

看取りが長期化したり、介護負荷が大きかったりすると、対象の死に際して直ぐには悲嘆を感じられない、感じるのは Relief(解放感)だけ、といったことがあり、それに伴う罪悪感等を心理セラピーの領域で Complicated grief(複雑性悲嘆)と呼ぶことを最近知つたが、その死の瞬間から襲われた圧倒的な喪失感と悲しみは、ヒトとの距離がなくなつた、というヤマの確信を証明するのみではなく、かけがえのない家族の一員であつたことをも確信していたことを祈る。

あきの素生

(くうねるめがね)



人っぽい」みたいなものへの憧れがあって、チョコミントは、きつとそれにぴったりだったのだ。

少し前から、スーパーのお菓子売り場やコンビニにチョコミント味の商品がやたらと増えている。既存のお菓子のチョコミントバージョンはもちろん、「チョコミントドリンク」や「チョコミントわらび大福」なるコンビニスイーツまで、その数とバラエティには目を見張るばかりだ。いったい何が起きているのか。

他にどんな商品があるのか、と思い、インターネットで検索しようとしたら、「チョコミント コンビニ」と入力したところで、「チョコミント コンビニ 2019」

「…2018」 「…2017」等の候補が表示された。驚いた。チョコミント味のコンビニスイーツは、毎年刷新されているのか。且つ、それを調べている人が、他にも大勢いるのか。チョコミント商品のまとめサイトまで作られている。チョコミント党員は比較的少数派だと思っていたが、案外市民権を得ていた。どころか、世間一般には、結構な市場規模と認識されているのではないか。なんとなく、期間限定でしかスーパーのアイス売り場等には現れない、不人気フレーバーだと自虐的に捉えていたので、うれしければ戸惑っている。

数あるチョコミント菓子の中からいくつか食べてみた。

チョコミント党である。

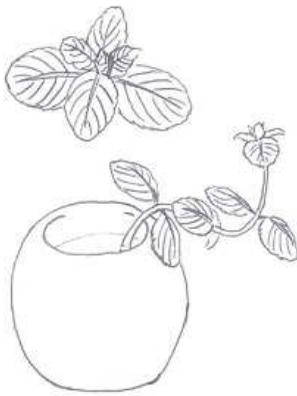
子どもの頃、祖母の家から帰るときに寄るショッピンゲンターで、たまにアイスクリームを買ってもらった。袋に入った棒付きアイスやカップアイスではなく、ショーカーに並んだバット入りのアイスから好きなものを選んで、その場ですくってコーンに乗せてもらう、アイスクリーム屋さんのアイスだ。いつもチョコミントを選んでいたのを覚えている。スースーする歯みがき粉が苦手なで、イチゴ味やメロン味のものであれば、かろうじて使えるといった子どもだったのに、なぜだろう。まったく思い出せないが、あの色合い、見た目が大きかったのかも、と想像する。毎月読んでいた少女まんが雑誌やその付録に、チョコミントアイスを食べている主人公のイラストが描かれていたとか、そんなところではないだろうか。子どもながらに、「おしやれ」「ポップ」「少し大

当たり前のようだが、それぞれに味わいが違って、興味深い。味がはっきりくっきりとしているもの、ミントの清涼感が強く残るもの（クッキーを食べて、お口の中が爽やかになったのは初めてだ）、ちりばめられたチョコチップの食感が絶妙なもの。小さい頃から食べてきて、「チョコミント」と一括りにしか考えていなかったが、「チョコ」であり、「ミント」なんだよな、と、今更ながら気づいた。どんな経験からも得るものがある。少し食傷気味なのはご愛嬌だ。

チョコミントとは関係なく、今年はミントを栽培している。ほぼ毎年、ベランダでバジルを2鉢育てるのだが、その1鉢をミントにしてみた。理由はない。苗売り場、なんとなく、ミントを選んだ。バジルだけだと寂しいし、ミントは強いと聞くから、世話が簡単なのは、くらい考えたかもしれない。ミントを植えたあと、『ミントのチカラ』（NHK出版編、NHK出版、2014）という本を見つけた。写真を見るに、私が選んだのはどうもスペアミントのようだ（品種を書いた札が付いていたのだが、鉢に植えるとき捨ててしまった）。ミントでも、例えば、ペパーミントとは、見た目もさることながら、香気成分や効能が異なるらしい。スペアミントは、葉が丸っこくてかわいらしい。見ているだけでもよかったのだが、

せつかくなので、水を入れたボトルに、15cmほど切り取ったミントの枝を入れて冷やしている。ミントの風味と甘みが、水にほんのり溶け出ている、おいしい。

ボトルの水を飲み切ったあと取り出したミントが、なんだかとても元気そうだったので、小さい器に活けてみた。すると、日の差す方に茎をねじ曲げて、数日後、根を生やした。小さなミントのど根性が、微笑ましくも頼もしく、夏ばて気味の心身に効いた。



脚立がこわい



ドラメリア (座敷わらし)

この休日に天井の蛍光灯を交換して、一日の仕事をやり終えたような気分になった。

結構重度の高所恐怖症なのだ。おかげで脚立に乗るのが怖い。それはもう実に怖い。こわこわ一段ずつ足をかけて、おとつと、とバランスを取る。それから天井の照明具に手をかけて、もう一度心を落ち着ける。その後、半目になって平常心を保ちながら交換作業をおこない、へっぴり腰で降りてくる。……作業頻度はそれほど高くないが、もうこれだけで汗びっしょりだ。今の住居に移る際、部屋数が増えたので器具類をあれこれ買い足しをした。その際なぜ昔ながらの吊り下げ型の照明にしなかったのか、そうしたらもつと低かったのにと悔やむ。

どうも自分が怖いのは、高い場所にいることが自覚できる場所で、掴まったり縄つたりするものがない不安定さなのだと思う。自力で降りられない高所に長時間留まるのも大変怖いので、遊園地の観覧車はおそろしくてと

でも景色を楽しむ余裕はない。そんな自分が絶叫マシン好きというのは何か矛盾しているような気もするが、人間は矛盾の塊なのだろう。

ちなみに、買い足すには先立つものがなかったもので、我が家はリビングにしかエアコンがなく、本の部屋は夏場はとても長居できない。猫たちは室温が選べてありがたいようで、涼しい部屋と熱帯部屋を行き来している。二本足のしもべが震えながらおこなう脚立での作業を、涼しい部屋で涼しい顔でしらつと眺めていた。



・編集後記:

先日、鹿野に蓮を見に行ってきました。広い蓮畑(というのかな)にいろいろな品種の蓮が咲いていて、とても綺麗でした。蓮根はどうしているのでしょうか、売っているのかな。ドラメリア(編集長)

ことばづたいに考えるとというのはわたしのスタイルですが、「ピオトープ」から「ユニット」そして「コンバート」(交換)というふうに道筋を考えはじめています。奈良敏行(発行人)